HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	脳外傷後患者における早期復職と神経心理学的検査の関連［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	飯田, 有紀
Description	配架番号：2594
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	甲第14512号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81550
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuki_Iida_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（医　学）　　氏 名　飯田　有紀

審査担当者
主査　教授　矢部　一郎
副査　准教授　朝倉　聡
副査　准教授　山﨑　美和子

学 位 論 文 題 名

脳外傷後患者における早期復職と神経心理学的検査の関連

（ Association between the neuropsychological examination and early return to work after traumatic brain injury ）

申請者は脳外傷後患者における早期就業復帰と神経心理学的検査の関連について報告した。重症の脳外傷患者の救命率の向上に伴い、その就業リハビリテーションは重要なテーマとなり、受傷後残存能力の評価には神経心理学的検査によるアセスメントが行われている。脳外傷の就業復帰は時間経過とともに復帰率が低下する傾向があり、早期の就業復帰が望まれる。早期就業に寄与する検査の先行研究は無く、本研究で明らかとなった。53 名の頭部外傷患者において、就労群と非就労群で解析を行い、早期就業に寄与し、他の検査と比較し重要となる検査は TMT-A、WAIS-Ⅲの下位項目の理解と語音整列と判明した。注意・遂行能力、新規課題解決、短期の情報保持・処理能力と、人生経験に基づいた常識的社会的な判断能力の向上が脳外傷患者の早期復職に有用であることが示唆された。本研究結果は、復職を目標とする脳外傷患者の就業支援において、より有効なリハビリテーション計画作成の一助となると考えられる。

審査にあたり、まず副査の山崎准教授から、脳損傷部位による検討と、脳外傷患者は前頭葉損傷による衝動性などの症状を有する患者が多いが、本研究対象の衝動性について質問があった。申請者は、本研究では脳外傷部位別に比較検討は行なっていないが、本研究以前に対象者が少ない段階で海馬の萎縮の有無で検査の比較を行なったが有意差を認めなかった、今後、より詳細な損傷部位別の研究が必要となること、また、本研究対象の衝動性については就業に支障をきたす衝動性を有する患者は本研究の対象としなかったと回答した。次に、統計方法について質問があった。申請者は、本研究ではロジスティック回帰により就業群と非就業群の能力差を確認し、さらに重回帰分析にて各検査間の重要性を確認した上で、Cox 回帰にて早期就業に寄与する検査の確認を行ったと回答した。加えて、解析する検査項目数を確保するために、検定の多重性を考慮していない点が本研究の限界であると回答した。副査の朝倉准教授から、対象の均一性について、とくに先行研究で報告のある性別や年齢、教育、受傷からの期間、急性期の意識障害期間など、就業に影響を与える因子の検討がなければ本研究の示す傾向に意義を見出しにくいのではないかとの質問があった。申請者は、本研究の対象は亜急性期と慢性期の患者が混在し、背景に受傷後麻痺や失語がなく、介護・療育の適応外のため障害を有しても社会支援が得られない患者に、

診断を行い適切な支援に繋げてきた社会的な経過があり、そのため診断までに時間を要した患者も含む研究となること、また、対象者の多くが高校卒業程度の教育歴であることを確認したものの、その他の性別・年齢・急性期意識不明期間などについて対象の均一化は行なっておらず、今後より詳細に対象を均一化した研究が望まれると回答した。主査の矢部教授から脳外傷後、高齢であれば遅発性脳障害、タウオパチーの発症が考えられるが、そのような病態が対象に含まれていないのか、加えて、対象の抑鬱状態が成績に影響する可能性について質問があった。申請者は、対象者の平均年齢は先行研究よりも高いが臨床経過よりタウオパチー発症者は対象者に含まれていないこと、また、神経心理学的検査は抑鬱状態より影響を受ける可能性があり、常時投薬加療が必要な抑鬱状態のある患者は対象に含まれていないことを回答した。次いで、検査時間を均一に設定し施行されたか、また、研究結果はどのように患者に還元されるのかとの質問があった。申請者は、全ての検査は概ね２週間以内に施行されたこと、結果の還元は効率的な早期就業への能力評価が可能となることに加え、目標設定を就業とする根拠となり得ると回答した。また、就業の定着率についてと、検査を組み合わせることでの就業予測精度向上の可能性について質問があった。申請者は、本研究は就業の定着率は検討しておらず、検討する際には就業環境等の多くの因子の解析を必要とする事、また、検査の組み合わせによる就業予測精度の向上については今後検討する予定であると回答した。

この論文は、脳外傷患者の就業において、先行研究では検討されていない早期就業に寄与する検査項目を明確にした点が高く評価される。また、頭部外傷患者は疲労が強く、より有益な情報を提供する検査項目を明確としたことで神経心理学的検査の優先順位を見出したことは臨床的な意義も高い。早期復職に重要な検査が明確になった事で就業支援におけるリハビリテーションのゴール設定およびリハビリテーション計画作成への一助となることが期待される。審査員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに充分な資格を有するものと判定した。